

五 肱川町を通る主要道路

1 国道一九七号線

北宇和郡日吉村を起点として、喜多郡長浜港に至る延

長八四歳の区間は黒瀬川・肱川の流れに沿っている南予を縦断する大動脈線である。

大正の初期五十崎・坂石間は里道として開設され、大正九年（一九二〇）四月県道に編入、路線名は日吉・長浜線となった。

省営バスを運行するため、昭和一二年から一三年にか

けて大洲―日吉間の改良工事を施行し昭和三〇年（一九五五）六月県道、近永―大洲線となる。

昭和三十一年昭和三十三年の二か年間建設省は、鹿野川ダム建設による水没区間肱川町石丸から、東宇和郡野村町坂石に至る道路の付替工事を行った。

昭和三十九年（一九六四）三月主要地方道に認定されていたこの道路の国道編入について当肱川町の発起によって大洲市・河辺村・野村町・城川町・日吉村その他沿線関係町村とともに、須崎―大分線（仮称）国道昇格期成同盟会を結成した。高知県須崎市・大分市とも連絡を密にし、国道昇格について強力に陳情を続けた。

昭和四四年三月会長池田肱川町長の退職により、城川町長増田純一郎が会長に就任、引続き運動を進めたが、遂に願望が達せられ昭和四五年（一九七〇）四月一日国道一九七号線に認定された。

当町を通る、国道に認定されたこの線は、昭和四五年より着工され着工と改修工事が進められている。

## 2 県道肱川公園線

大正の初期、横林村が町村道改修の先駆けとして藤之原を起点として施工していたが、昭和四年（一九二九）一月奈良野―内子線として県道へ編入された。粟太郎から五十崎町に通ずる道路は、昭和二四年開通し、これによって全路線が完成したのである。昭和三十三年（一九五八）六月県道内子線として認定。

昭和四七年（一九七二）二月には子子林の藤之原―鹿野川―赤岩―粟太郎―五十崎―内子に至る延長二四・三一三歳が地方主要道、肱川公園線として認定された。

## 3 県道北平―大洲線

隣村河辺村を起点とし鹿野川―森山―大洲市柚木に至る延長三〇・四〇三歳。大正元年（一九一〇）河辺村においては、村の中央を貫通する道路として起工、大正二年（一九一三）元浮穴村の村境迄開通、同年県道に編入。昭和二五年（一九五〇）国鉄バス導入のため拡張工事を施行。昭和三十三年六月北平―大洲線として県道に編入された。

## 4 県道山鳥坂―名荷谷線

粟太郎―弁天間は、昭和一〇年（一九三五）着工、昭和四四年（一九三九）四・四歳を完成した。

弁天―日の平間は、昭和三六年（一九六一）に着工し順次工事を継続して、昭和四一年日の平迄延長二・九歳を完成、更に昭和四二年より四三年に羽座谷線約二・二歳を完成した。河辺地内の道路は、この道路と接続し約一〇歳が、昭和四八年六月県道に編入された。

## 5 県道蔵川―大谷線

大洲市の蔵川を起点とし、肱川町大谷橋（国道）に至る八・四歳。白石を経て大谷川に沿い大谷部落を縦断する幹線である。

昭和二年（一九二七）大谷村が町村道として大谷橋より起工した。白石部落内には、堀森太郎が私費で開設した区間がある。昭和三十一年（一九五六）国鉄バス導入のため路線改良工事を施行。全線完成後の昭和四八年（一九七三）県道編入が実現した。

## 6 県道西谷―野村線

上浮穴郡柳谷村西谷を起点とし、東宇和郡野村町に至

る延長三四歳。当町関係区間は小倉―中津間二・四歳。

この線は、大野が原線として東宇和郡惣川村（野村町）が、大正八年（一九一九）に起工し、関係村で道路改修工事事務組合を設立して開設したものである。

昭和三十三年（一九五八）六月県道となる。

## 第二節 ダム建設と捷水路

### 一 鹿野川ダムの建設

肱川本流は、源を東宇和郡宇和町多田字正信に発し黒瀬川・船戸川・河辺川・小田川・矢落川及びその他の支流を合せ大洲平野を貫流し、長浜町に至り伊予灘に注ぐ、県下第一の河川である。

この肱川は、川巾が狭く奥地の集水面積が広いので、ひとたび豪雨となれば、急激に水量が増し氾濫した。

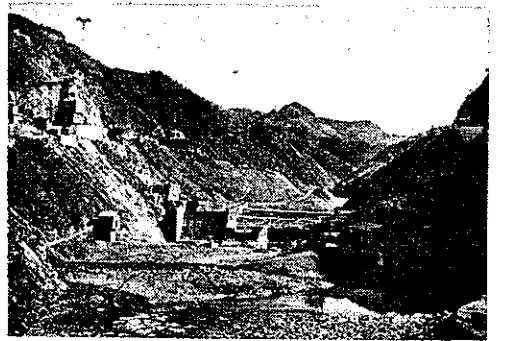
古来、数多くの洪水による被害を受けて来たが、下流の大洲市周辺の平地一帯は、特に大きかった。



第196図 鹿野川ダム建設地

昭和一八年（一九四三）と昭和二〇年（一九四五）には、かつてない洪水により未曾有の災害を蒙った。肱川流域関係町村は肱川治水期成同盟会を結成していたが、治水の抜本的な対策としては、肱川上流にダムを構築して、洪水の調節を図る以外にない、との結論に達した。そこで、喜多郡町村会が中核となって、肱川ダム建設期成同盟会として、再発足し促進運動が進められた。国と県においては、洪水の調節と併せて貯水池を利用して発電しようと計画し、昭和二六年（一九五一）二月地質・地盤・地形・浸水区域・貯水量等各種の調査が始められた。

最初は宇和川地内、天狗嶽付近の調査が進められてい



第197図 ダム建設すすむ

成、県並に建設省に対し、中止方の陳情が活発に始められた。

しかし県においては昭和二八年度（一九五三）に肱川総合開発事業費の予算五、四〇〇万円が決定し、画期的なダム建設の工事に着手した。

昭和二九年一〇月には工事事務所を開設し、道路敷等の他の補償問題も順次解決していった。

た模様であったが、鹿野川付近がダム建設の適地とみとめられた。そして、昭和二七年には、本格的な測量と設計が始められた。

この頃より、ダム水没地区住民の反対運動が起り、肱川ダム建設反対同盟を結



第198図 鹿野川ダム起工式

昭和三一年鹿野川、大地間及び坂石付近の道路付替工事に着手、同年一二月には起工式、仮締切による排水に取りかかり、清水建設の手による本体工事が、開始された。

昭和三二年（一九

五七）六月一日定礎式を行い、コンクリートの打込が始り、近代の機械による工事が昼夜続けられた。同年六月には南条建設大臣、一〇月には根本建設大臣の視察があった。

この間ダム建設反対運動に対しての説得が続けられ、県議会の議員とともに再三の協議・懇談を重ね、漸く了解がついた。

宇和川・黒瀬川・船戸（三橋は野村町）・大谷の四橋や新



第199図 大谷橋竣工式

設の道路も完工し、昭和三三年四月には仮排水路を締切って中央排水路に移し、同年一〇月三〇日湛水式を挙げるに至った。

昭和三四年（一九五九）総ての工事を終り、昭和三五年一月一六日鹿野川ダムの竣工式が

盛大に挙行された。

このダム建設については三〇億の巨費を要し、工事従事者から七人の貴い犠牲者を出し、二九〇戸の住家と田畑、山林の合計一八〇軒が湖底に沈んだ。

鹿野川湖と名づけられた貯水池の周辺一帯は、県立自然公園に指定された。

鹿野川ダムの概要

鹿野川ダムは、治水（洪水調節）及び利水（発電）

の多目的ダムで建設省直轄事業として、昭和二八年一月調査を開始し、昭和三四年三月完成、昭和三五年二月建設省から愛媛県へ移管された。

河川名	肱川水系 肱川
位置	喜多郡肱川町大字山鳥坂
地質	砂岩 頁岩 輝緑凝灰岩
型式	重力式 コンクリートダム
高さ	六一・〇呎(基礎岩盤より堤頂まで)
長さ	一六七・九呎
体積	一六一、〇〇〇立方呎
門扉	テントーゲート(巾二二・〇呎×高さ二〇・三呎)四門・
放水管	巾九〇呎
集水面積	四五五・六平方呎
湛水面積	常時 二・〇九平方呎 洪水時 二・三二平方呎
湛水長	一一・〇呎
満水位	常時 EL八六・〇呎

貯水量	洪水時 EL八九・〇呎 総量 四八、二〇〇、〇〇〇立方呎
有効水深	有効 二九、八〇〇、〇〇〇立方呎 常時満水 一四・〇呎 洪水満水 一七・〇呎
予備放流水位	EL八一・〇呎
最低水位	EL七二・〇呎
計画洪水量	二、七五〇 $m^3/s$
計画調節量	一、二五〇 $m^3/s$
計画放流量	一、五〇〇 $m^3/s$
建設費	三、〇一五、〇〇〇千円

### 二 嵯峨谷捷水路

この工事は地すべり防止対策として、河辺村の発意により当町嵯峨谷の堀、河辺川岸に、建設省の直営工事として施行された。

昭和三四年(一九五九)一月着工、工事費四四、八〇〇万円を費し昭和四三年(一九六八)から、実に九か年